

ボルネオ島における生物多様性の現状

島に暮らす様々な動物

ボルネオ島にはいったいどれほどの動物がいるのでしょうか。ボルネオ・ジャングル体験スクールでは、これまで15回ボルネオ島のマレーシア・サバ州を訪れ、熱帯雨林のなかでさまざまな動物を見てきました。ざっとあげると、オランウータン、クリイロリーフモンキー、カニクイザルなどサル仲間、スイロク、ジャコウネコなどの中型動物、リス、ネズミ、コウモリなどの小型動物、そして多数の昆虫類やヤスデ、ヒル、シロアリなど地面にいる小さな動物まで多種多様です（写真1）。しかも参加した子どもたち自身が比較的簡単に目撃してきました。それだけ動物の生息密度が高いということです。

ボルネオ島は世界の中でも種の多様性が極めて高い地域の一つで、いろいろな動物に遭遇するのは当然といえるかもしれません。しかし、これはじつは異常なことで、ふつうはそう簡単に野生動物に会えるものではありません。なぜこのようなことが起こるのでしょうか。

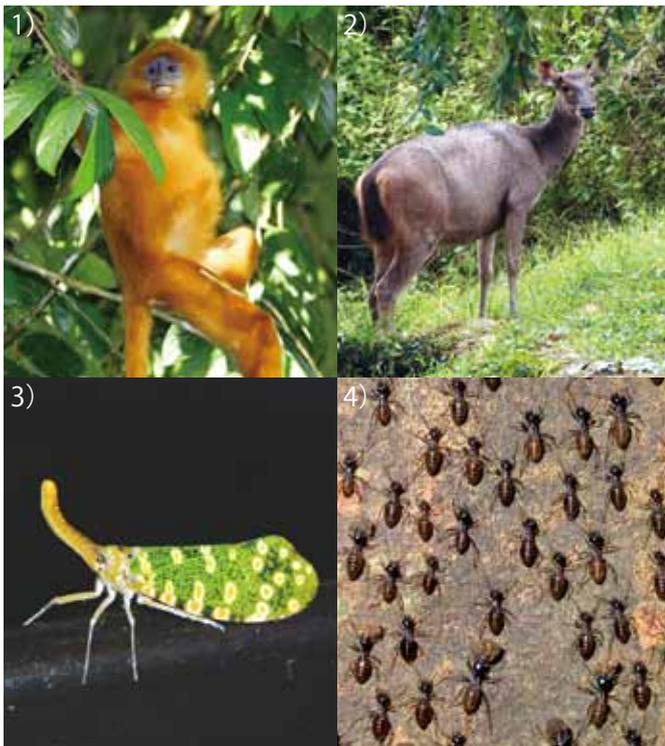


写真1 ボルネオの熱帯雨林で見られた動物

1) クリイロリーフモンキー、2) スイロク、3) ビワハゴロモ、4) シロアリ。

進む自然破壊

ボルネオ島ではもともと熱帯雨林だったところが伐採され、森林面積が減少しています（写真2、3）。サバ州においては、1980年代の森林残存率は約80%でしたが、2005年の時点で60%になり、現在は50%以下にまで減少しているとみられています。しかもその森のほとんどは伐採された後に再生した二次林で、原生林は5%以下しか残っていません。森林伐採の理由はいろいろありますが、最近とくに顕著なのは油ヤシ農園への転換です（写真4）。油ヤシ農園が採算をとるには最低でも3000ヘクタールの面積が必要だとされています。そのために熱帯雨林が次々と伐採され、動物たちは奥へと追いやられていくのですが、皮肉にもこのことが動物を集中させ、われわれと遭遇する機会を増やしていたのです。

油ヤシから採取されるパームオイルは、多くの食品のほか、洗剤や化粧品、医薬品などに使われ、



写真2 熱帯雨林の原生林（マリアウベイスン）



写真3 伐採した丸太を運ぶ木材運搬車

日本でも私たちの生活になくってはならないものになっています。主要な生産国であるマレーシア、インドネシアから世界中へ輸出され、貴重な外貨獲得産物になっています。熱帯雨林の保全と地元の人たちの生活向上を考えると、どちらか一方だけを取ることはできません。両立するようにバランスを保っていく必要があります。



写真4 油ヤシ農園の様子

アブラヤシが整然と並んだ風景がどこまでも続く。

ボルネオの熱帯雨林を守るために

東南アジアの熱帯雨林破壊が地球規模の環境問題だとして、マスコミでさかんに取り上げられたのは1990年代でした。今ではほとんど話題にされませんが、ボルネオの森では現在もなお深刻な問題なのです。ボルネオ島に国土を持つマレーシア、ブルネイ、インドネシアの3カ国は、ボルネオ島の熱帯雨林のそうした現状に危機感をもっており、それぞれ森林資源の保全や持続可能な林業経営に取り組んでいます。世界自然保護基金(WWF)によると、ボルネオ島中央部の「ハート・オブ・ボルネオ」と呼ばれる自然豊かな地域で、2007年からの3年間に120種にもものぼる新種の生物が発見されたそうです。ボルネオ島には珍しく、貴重な動植物がまだまだたくさんいるものと思われ、世界規模で大切にしていかなければならない自然だと思います。

高橋 晃 (自然・環境評価研究部)

夢づくり事業「ボルネオジャングル体験スクール」

ボルネオジャングル体験スクールは、1998年、当時の館長 河合雅雄先生の発案により、第1回を実施して以来17年間で15回実施されました。その間、事業内容の充実を図りながら、当館の目玉事業として定着し、約400名の卒業生を送り出すこととなりました。

彼らの足跡をたどると、各方面において活躍の方も多く、参加をきっかけに生物の専門分野に進み、海外で活動を続ける方も多数おられます。また、アンケート等からは、「自然保護官になりたい」「地球環境の保護に取り組みたい」「国際交

流に関わる仕事につきたい」など、現地での活動・体験を基に、自分の将来や夢について真剣に考える姿もうかがえます。その意味で、本事業は、次代を担う若者に新たな未来の種をまき、社会や科学の発展に少なからず貢献してきたといえるでしょう。

このような意義深い取組が、今年度をもって終了するに際し、惜しむ声も多くいただいておりますが、これまでの反省を基に、新たな展開が図ればと思っています。

橋尾和紀 (生涯学習課)



スガマ川での生き物観察



フィールドセンター前で記念撮影